

LEONTODO

N-ro 69

| 目次 | 頁 |
|---|----|
| 第47回北海道エスペラント大会プログラム (Programo de la 47a Kongreso) | 1 |
| ドイツ人から見た最近の日本 日独学術交流会東京事務所長 ウルリッヒ・リンズ (通訳: JEI広報部長 梅田 善美) | 3 |
| 国際関係における言語問題について ウルリッヒ・リンズ (通訳: 尻玉 広夫) | 13 |
| エスペラントが役に立つのはどういうことで 役に立たないのはどういうことか? (翻訳: 梅田 善美 北畠 ひとみ) | 17 |
| Sami deano 朝井喜一郎 遺稿 星田 淳 | 19 |
| S-ro 小坂 猶二のおもいで (Esperantistoの対社会発言について) 星田 淳 | 21 |
| サンフランシスコ州立大夏期講座に参加して 小林 貴美子 | 23 |
| エスペラントの歴史は書き改められなければならない!! (ほんやく) 尻玉 広夫 | 27 |
| Arkivo de HEL (8) ~地方機関誌 花盛り(2)~ 相沢 治雄 | 31 |
| Ĝis-revida parolado de D-ro Ulrich Lins | 35 |

~~~~~

## 別冊付録

シベリヤに同志を訪ねて「小樽市民友好の船」

星田 淳

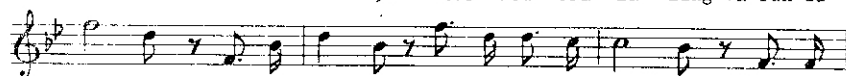
# La Espero

Poez. L. L. Zamenhof

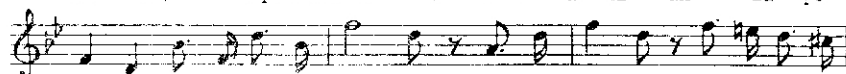
Muz. F. de Ménéil



1. En la mon-don ve-nis no-va
2. Sub la sark-ta sig-no de l'es-
3. Sur neŭ-tra-la ling-va fun-da-



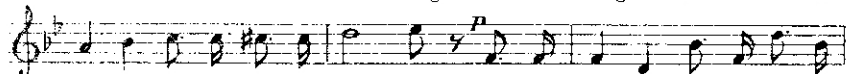
sen-to, tra la mon-do i-ras for-ta vo-ko; per fu-  
pe-ro ko-lek-ti-ĝas pa-caj ba-ta lan-toj, kaj ra-  
men-to, kom-pre-nan-te u-nu la a-li-an la po-



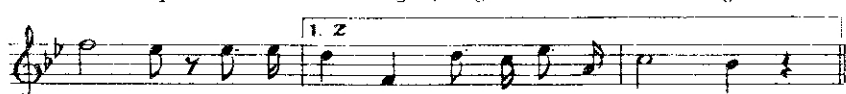
gi-loj de fa-ci-la ven-to nun de lo-ko flu-guĝi al  
pi-de kres-kas la a-fe-ro per la-bo-ro de la es-pe-  
po-loj fa-ros en kon-sen-to u-nu gran-dan ren-don fa-mi-



lo-ko. Ne al gla-vo san-ĝon so-i-fan-ta ĝi la  
ran-toj. For-te sta-ras mu-roj de mil-ja-roj in-ter  
li-an. Ni-a di-li-ĝen-ta ko-le-ĝa-ro en la-



ho-man ti-ras fa-mi-li-on: Al la mond'e-ter-ne mi-li-  
la po-po-loj di-vi-di-taj, sed dis-sal-tos la obs-ti-naj  
bo-ro pa-ca ne la-ci-ĝos, ĝis la be-la son-ĝo de l'ho-



tan-ta ĝi pro-me-sas sank-tan her-mo-ni-on.  
ba-roj per la sank-ta a-mo dis-ba-ti-taj.  
ma-ro por e-



ter-na ben' e-fek-ti-vi-ĝos.

第47回北海道エスペラント大会プログラム

1983年9月17日(土)~18日(日)

札幌市中央区北4条西6丁目

北海道自治会館4F「はまなす」

第1日(9月17日)

14:50 ~ 受付開始

15:00 ~ 17:00 自由懇談

17:00 ~ 18:00 夕食

18:00 ~ 20:00

スライド上映、寸劇、歌唱等

20:00 ~ 自由懇談

( マールクシユ・ガーボル氏を囲んで )

第2日(9月18日)

9:00 ~ 10:00 初級試験(和訳、エス訳、会話)

10:00 ~ 11:40 大会協議

議長選出

HEL 会長・来賓挨拶

HEL 及び地方会報告

自己紹介

HEL 役員選出

次期大会開催地決定

11:40 ~ 12:00 記念撮影

12:00 ~ 13:00 昼食

13:00 ~ 15:00 講演

演題： 「日本留学体験、見たまま、聞いたまま」  
南山大学留学生(ハンガリー) マールクシユ・ガーボル

「ブタペスト世界大会に参加して」  
(小樽市) 山賀 勇

「サンフランシスコ州立大夏期講座に参加して」  
(苫小牧市) 北畠 ひとみ

15:00 閉会宣言

P R O G R A M O

de

La 47-a Kongreso de Esperantistoj

en

1983-09-17/18

Hokkajdo

en Sapporo

ĉe Hokkajdo Jijikaikan

La Unua Tago (la 17an de septem.)

14:50-17:00 Giĉeto, Interkona kunsido "Hamanasu" 4F

17:00-18:00 Vespermanĝo

18:00-20:00 Lumbildo, Amuzajoj, Drametoj ktp.

20:00 .... Interbabilado libera

La Dua Tago (la 18an de septem.)

9:00-10:00 Elementgrada Ekzameno

10:00 Ĝenerala kunsido de HEL

- 1) Malferma deklaro
- 2) Kanto de L' Espero
- 3) Elekto de la kongresaj prezidantoj
- 4) Salutoj de l' prezidanto de HEL kaj de gastoj
- 5) Raportoj de HEL kaj Lokaj grupoj
- 6) Sinprezentado
- 7) Elekto de HEL-komitatanoj
- 8) Decido de la venontjara kongresejo

11:40-12:00 Memoriga fotado

12:00-13:00 Tagmanĝo

13:00-15:00 Prelegoj

Temoj:

- 1) Pri miaj spertoj vide kaj aŭde en Japanio  
s-ro Markus Gabor
- 2) Partopreninte la universalan kongreson  
en Budapeŝto d-ro Jamaga Isamu
- 3) Partopreninte la someran kurson de Esperanto  
en Sanfransisko-Universitato  
f-ino Kitabatake Hitomi

15:00 Ferma soleno, Kanto de l' Tagiĝo

第46回北海道エスペラント大会記念  
一般公開講演会講演録

ドイツ人から見た最近の日本

日独学術交流会東京事務所長

ウルリッヒ・リンス

(通訳・JBI広報部長 梅田善美)

私は東京におりまして、主として日本とドイツの間の学術的、科学的な交流情報の交換の仕事に携っております。ということは、私どもは、ドイツの大学のシステムについて日本の方々にお知らせすると同時に、日本の大学でのいろいろな在り方についてドイツの人達に情報を提供する、という仕事に携っております。

私の日常の仕事振りからして、毎日が日本とドイツのいろいろな関係を結びつける仕事をしているわけです。一般的に申しまして、日本人とドイツ人は性が合うと言いますか、お互いに好意を持ち合っているので仲が良い間柄にあります。日本人がドイツ人をどういふ訳か好きであり、ドイツ人も日本人を大変好きになつている。そういったことが影響して、私の日本での仕事が非常に楽に行なわれています。

例えば、初め日本に参りました時困つたことは、日本の方々からドイツの民謡とか古い歌を良くご存知なので、何かというとそういう歌を聞かされますが、私はそういう歌を知らないで大変恥かしい思いをしなければなりません。それから心温い想いをしますのは、年を取つた方々が若いころ習つたドイツ語で話しかけて下さることです。

そういうお互いに好意を持ち合うことは大事なことなのですが、そういうことがお互いの国の関係をスムーズにしていますけれども、それだからと言って私達はそれだけで満足していません。と申しますのは、そういう好意は、いつも正しい情報に裏打ちされていないという事実があるからです。本当にお互いに正しい知識を持つているかどうか考えなければいけないと思います。

お互いに持つている好意を一つの要素と考え、又お互いにどの位知識を持つているかということをもう一つの土台として考えて参りますと、日本とドイツ二つの国の間でいろいろなことが考えられます。

例えば、日本の方のドイツについて持っている知識というのは、一種の典型的な型があり、ローレライについては良く知っていますし、札幌に参りますと殊にドイツのビールということでビールがドイツと結びつけられます。ところが日本人には一種の型にはまつたドイツの知識だけでなくドイツの文学、哲学、特に音楽について深い知識を持った方が居ます。

他面ドイツで考えると、ドイツ人が持っている日本の知識というのは、やはり鑄型にはまつたもので、例えば、フジサン、ゲイツヤ、サムライといった類いのもので、ドイツ人もステレオタイプの知識であります。それ以外に日本に対して深く研究してみようとか、内面的に確立してみようとかいう人は少ないのです。

両国の知識を分析するためには、歴史的なことにさかのぼつて考えなければならぬのですが、簡単に考えられることは、お互いの知識の程度にアンバランスがあるということです。日本人がドイツ人に好意を持つという背景には日本人の持つ独特な知識欲があります。ドイツの物を吸収しようという知識欲。ところが、ドイツ人が日本人に好意を持つといたしましてもドイツ人が日本に対する知識を持つことが少ないのです。

今申し上げました特徴的なアンバランスは最近変りつつあります。

この十数年の間に人的交流が盛んに行なわれるようになり、同時にドイツ人が日本人と接する機会が多くなり、又、多くの日本人が直接ドイツ人と交わることによつていろいろな知識を得ることができるようになりました。もう一つ、もつと大事なことは、ドイツ人は一種の日本から経済的な圧迫を受けていることが大きな一つの要素となつて、もつと日本のことを良く知るべきだという傾向が生じてきているのです。こういう意味で、今までのドイツ人の日本に対する知識というのは一種の何か啓発されるものがあつたのですが、それだけでなく、経済的にも商業的にもヨーロッパで成功を収めている、それが又ドイツにも波及している、そういうことが一般のドイツ人が日本の商品を日常生活の中で目にしたり使わなければならなくなつてきている現実なので、日常生活に結びついた中で日本を評価するということに變つて来ているのです。

日本の新聞、雑誌では日本がヨーロッパの商業マーケットで非常に成功を収めていることは、さまざまな報道がされているので、私が改めてご紹介することは、はばかれることですが、これから申し上げる中から何か新しいものをつかんでいただければ幸いです。

今から申し上げようとするすべての事柄は残念なことに、私が日本に勤務中に起つていることなので直接見たり聞いたりしていないこととおことわりしなければなりません。しかし毎年ドイツに帰つていて、さまざまな情報を入手していますが、毎日ドイツのテレビを見ているわけではありませんので、私のこれから申し上げる大部分は、新聞、雑誌に現われた日本の情報と考えていただきたい。

私は、全体的な印象として、日本が商業マーケットで非常に多くの成功を収めて来たことに対するドイツ側の反応としては今まで伝統的に持っていた日本に対する評価とはあまり変つていなかつたとは思つていません。

4、5年前ですが、ドイツの有名な週刊誌デル・シュビーゲルが日本の自動車のヨーロッパ侵入について詳しく分析したことがあり、日本の自動車がどんどん入つて来て、やがてはドイツの自動車産業の危険性さえもたらすであろうと予言しました。このシュビーゲルは、ご参考までに申し上げますが、批判精神の豊かな週刊誌として知られていて、その記事の中でも反日的な記事であつたわけで、それはその批判精神が基になつてすべてに対して批判的であるということで、日本に対しても一種の批判をしたというわけです。おもしろいことに——この記事に対する読者の反応がどういうことであつたかということですが——日本の自動車産業に対する内容の豊かな記事が出た2週間後に読者からの手紙を紹介したのですが、そのうち80%までが日本の経済発展に好意的であり、もし技術的に進んでいるものであれば日本の自動車をかいますヨという手紙が多かつたということです。これからもE0が日本の自動車をヨーロッパに入れることを制限するような政策を取るならばどんな手段を講じてでも日本の車をかいますヨという強い意見を述べた人もありました。言葉を代えて言えば、ドイツ人の日本の自動車についての第一反応としては、一般消費者は自分の国のことを盲愛するというのではなく、技術が良ければ日本のものをかいますヨと言つているのです。

これも数年前ですが多分アサヒテレビが放送したものだと思いますが、「ヨーロッパにおける日本に対する誤解」というテーマの番組を流したことがあります。その日本のジャーナリストのチームがドイツにも来たのですが、その時1人のドイツ人ジャーナリストが日本のテレビ局のスタッフ達と行を共にしてドイツの中を一緒に取材して廻つたのですが、日本のスタッフ達がこぼすことは、ドイツでは日本を誤解している要素はみつからなかつた。映像にするもの

がなかつたということでした。

皆さん記憶されていると思いますが、数年前のことですが、田中事務局長で非常に変な報告を出しましたネ。つまり「日本人は兎小屋に住んでいる」という報告なのですが、このことについては、ドイツでは真剣に取り上げられてドイツの議会でも問題になりまして。ドイツの議会の副議長が強い調子でイギリス人は間違つた見方をしていると批判をしました。

私は、今まで申し上げたことを通じて、だからと言つてドイツ人がすべて日本人に好意的であるというわけではないのです。やはり日本の経済的な攻撃に対して非常に不安を感じているドイツ人も必ずしも少なくないわけです。例えば、ドイツのある産業分野では経営がうまく行かなくなつて倒産がおこつてきて、それも日本の経済進出のせいであるとする人もいます。ここで大切なことは、ドイツでは日本に対する注目がだんだん高まつているということです。日本人がどうしてドイツ人よりも成功を収めているかという理由を探ろうという人がふえているわけです。3年前ですが経済大臣が日本を旅行して帰国しての記者会見の中で「ドイツの労働者はもつと日本人と同じように勤勉に仕事をしなければ、日本の競争力には負けてしまう」と発言しました。勿論大臣は単純に日本人の勤勉さをドイツ人が学ぶべきだ、と発言したからと言つてそれで事が終れりとは思つていながつたに違いない、問題点を単純化して出来ればドイツの中で世論が話し合いを続けてくれるだろうと期待したのだらうと思います。正にそれが的中してドイツの労働組合の幹部は一斉に反論を加えました。ドイツの労働組合の栄光をけがすものであると発言しました。経済大臣の挑戦を受けて立つた新聞、雑誌もいろいろなディスカッションの論陣を張つたのですが、どうして日本の産業がドイツよりも優れているのか、ドイツを打ち負かそうとしているのであろうかという理由を探つてみたわけです。そのうちの一つに、日本人は進んで自動化をし、生産性を高めるために合理化を進んでやつているということの一つの理由に取り上げました。

「時代」という雑誌も日本について取り上げています。5年前にこの雑誌がシリーズで世界文学の百の作品を連載したことがあります。このシリーズはヨーロッパ中心主義に行なわれていて日本のものは一つもなくて、ヨーロッパ以外のものは千夜一夜物語のみでした。そういうふうに日本を全く無視していた雑誌でさえも最近になつてわざわざ日本に取材チームを派遣して日本のことを取材して紹介する。それも数週間にわたつて連載をするというふうになつて



来ました。非常に長いしかも分析的な記事を次々と出してはいたわけですが、その記事を要約すると次のような7つのカギにしぼることができます。これからご紹介する何故日本が成功したかという7つのカギは要約したものですから皆さんのご参考になると思います。

- 1 日本の中にある歴史的、文化的環境が培つて来た日本人の心理、心理作用グループ指向
- 2 階級差別のない社会的な構造の中に生きることによつて一種の単一的な社会を構成している。したがつて、あまり他人の暮らし向きなどに対して羨望の目を持つて見ない社会構造
- 3 日本人には非常に大きな学習意欲があり、外国のものでも役に立つものはどんどん取り入れていくという積極的姿勢がある。
- 4 各事業所、会社においてその構造が労働者が満足して働らくようにうまく配置されている。
- 5 ヨーロッパ、その他世界の部分ではみられない特別な産業構造ができ上つている。
- 6 産業間の協力が割合良く行なわれていて、政府機構にいる官僚が非常に優れている。
- 7 日本人全体として経済的發展を国家目標であるという考えを持つている。

皆さんが今紹介した7つのカギ全部にご賛同なさるかどうかわかりませんが、少なくともドイツにおいては、これは日本が成功している原因として非常に納得されている問題の提起の仕方だと思つています。しかしながら、今申し上げました「時代」という雑誌のシリーズの中で最も成功しなかつた日本の紹介は日本文化の記事であります。今ここでお見せしますが、「大阪から東京へ行く列車の中の芸者達」という見出しで書かれているものですが、この中で日本のご婦人方は日曜日になるとたちまちひょう変して日本の古典的な着物姿に変つてしまう、という間違つた紹介をしているのです。もう一つご参考までにお見せしますが——御夫婦の写真だと思ひますが——お祭の写真の説明の中で女はいつも男のあとについて歩いていただけなのです。そういうことで、非常に有能なジャーナリスト達が日本について紹介の努力をしたにもかかわらず、日本の文化を紹介する記事が数段劣つているということは、やはり日本文化に対するドイツ人には伝統的な日本に対する一種の鑄型が残つているということの意味すると思ひます。それは不思議なことではありません。経済は数字を分

析したり経済学者や専門家達にいろいろ評論してもらえば出来ることでありますが、文化は非常に広い分野にわたっており、それを紹介するとすればジャーナリストは易きについて伝統的な鑄型に戻つてしまおうとするのです。

日本に対するドイツにおけるこういうディスカッションをもつと続けて紹介しましょう。

2年程前から非常にはつきりして来たことは、自分達の国の経済的な未来予測が非常にはつきりしない立場になつているということをもふまえて、日本の挑戦をよい意味で良いショックと受け止めているということです。ドイツ人が自分達の暮らしに安住しているのではないか、怠けぐせがついたのではないかという反省が生まれています。今年私が帰国した時に話しが出た中で、日本がああいうふうにわれわれを刺戟してくれることによつて、われわれが犯しているあやまりを気付かせてくれたと評価している人もいました。

ドイツでは一番権威ある新聞としてフランクフルター・アルゲマイネがありますが、この新聞の論説で、東京から帰つたばかりの論説委員が書いているのですが、この委員は日本に来て非常にショックを受けて帰つたのです。もう日本ではドイツに対して、すでにドイツ人はドイツ病にかかつているというふうに答えをしているということです。彼はこういう形で自分の国の人達に対して、何故われわれは経済的な一種の危機に陥つているのだろうかということを問いかけているのです。その意味で、私がさき程申し上げましたようにドイツでは日本に対する論議が非常に大きな広がりを見せていることが立証される訳ですが、例えば、今までドイツ人がそういうことを話題とすることをタブーとしていた問題の一つに社会保障問題があります。というのはドイツ人は自分達の保険制度年金制度という社会福祉に対して非常に自信を持っていましたし、それを自慢さえしていましたが、最近はそのが少しくづれて来て、ドイツが経済的な意味で衰退して来た一つの理由として、あまり社会福祉に力を入れすぎたのではないかという人さえも出はじめています。

もう一度こういう多面的な日本に関する論議がドイツで行なわれているというご紹介の中で、反日的な論議も行なわれているということを紹介しないといけないと思いますが、一つの声として、労働組合の指導者は、日本の労働者があまり休まないで働らくということはフェアでない、不公平であるという発言をいたしました。ある労働組合の幹部は日本訪問の際に日本の労働組合の指導者達に労働者はもつとストライキ権を活用すればいいのにと忠告さえ与えたこ

ともあります。労働組合の人は一般に新しいものがおこつてもそれになじんでいくというのは苦手の人達ですから、今申し上げたことはあまり気になさらない方がいいと思いますが。一つここで紹介したいのはドイツの有名な書店が発行したのですが、タイトルは「労働国日本」というものです。これは一種の積極的な日本像に対する反応のような形で表わしたのですが、これを書いたのは3年間日本にいて日本に精通したとされる2人のドイツ人ジャーナリストですが、今まで非常に例外的に日本について好意的な記事を書いたことに対する一種の反応として現われた記事です。要するにフィルムで申しますとネガとポジの部分で、自分のネガの部分を紹介しようとしたのですが、日本の犯罪を紹介したり、政治家とヤクザのつながりを紹介したり、右翼を取り上げたり抑圧された女性問題を取り上げたりというように日本の負の部分を取り上げているものです。ドイツの資本家達は日本の挑戦を受けて立つて、もつとドイツの労働者達に規律正しい教育をする必要があるということも提言しています。この本はどちらかというとながかつた立場の人達の見方で書かれているわけで、中で取り上げられていた日本の負の部分、恥の部分をごとさら出そうという立場はあまり歓迎されるものではなく、私自身は困つた本だ、ちゃんとした資料を全部当つて書いた本でないと思つていますし、ジャーナリストはめつたに同業者を批判するということはないのですけれども、この本を書評した新聞記者——東京在住のドイツの新聞特派員——もこのことを非常にこきおろしています。

先程ご紹介しましたデル・シュビーゲルという雑誌が今年初めに出した号の中に論説として掲げた記事があります。この表紙に書かれている見出しとして「日本人から学ぶべきか？」と疑問符をつけて、答は「ノー」であるということになっています。この記事を読んで私が感じましたことを卒直に申し上げますと、ドイツ人の物の見方からすれば、シュビーゲルの論説に同意したい所もあります。例えば、日本的な社会的構造をそつくりそのままドイツに当てはめることはできませんし、日本のいろいろこれまで積み上げて来た経験がそのままヨーロッパに適用するかというところでもありません。といつてこのようにいきなり日本から学べるか、ノーであるというような非常に単兵急な結論を出すのはいかがなものかと思ひます。

(カッコ付で申し上げますのでそのつもりでお聞き願ひたいのですが。この記事を読んだあと日本の大学のドイツ語を教えている教授の方に——この方は

シュビーゲルを購読している方ですが——この記事についてどう思いますかと質問したところ、このシュビーゲルとしては非常に良いことを書いてくれたということでした。というのは最近いろいろと取沙汰されている麿物に近い日本の政治家とか経済界人とかを非常に前面に出しているからです。これは今申し上げましたように私のカッコ付きですから今日のテーマから外れています。) )

また今日のテーマに戻りましょう。

一般的に申し上げましてドイツ人は日本人について或いは日本の社会について原則として積極的な関心を持つているということは確かなことです。例えば個人的な関係で申し上げますと、ドイツの自分の家の部屋を日本の商社の方に貸します。そういう場合でもその借りた方の態度が良いものですからこの次も日本人に貸します、そういう態度が出て来るのです。ですからこういう直接的な人間関係の中で生まれて来ているお互いの関係は今後も樂觀してもいいのではないかと思います。東京の日本の外交官の人達に伺いますとヨーロッパでは日本人はいろいろ問題を起しているが少くともドイツではあまり問題はないということです。

大事なことを申し上げなければならないことは、ドイツの間ではこういうことが感じられ始めているということです。それは、日本のいろいろなやり方をモデルとしてそつくりそのまま頂くことは出来ませんが過去の誤りは誤りとして認め、未来について新しい方向づけをする必要がある。そのためには、例えばドイツのいろいろの人達が新聞等でも発言していることですが、もつとドイツの大学で日本の専門家を養成すべきである。教育すべきである。日本語を話せる人をもつと沢山教育すべきである。それによつてドイツ人が日本の市場にどんどん積極的に出かければ良いのではないかということ。もう一つ日本人が持っている非常に積極的な技術導入には資本を惜しまないという態度も真似しなければならぬ、ということなのです。

ここで皆さんも多分興味を持つていただけると思うのですが、ドイツでも一種の日本に対する抵抗を感じる部分があるのです。それは平均的なドイツ人としては超現代的な科学技術ということに対する抵抗があるということです。例えばマイクロ電子工学という進んだ工業技術について抵抗を感じているドイツ人が少なくないのですが、それについては未来指向型のドイツ人は「日本人は全然そういう電子工学を受け入れることに抵抗を感じていませんヨ、ドイツ人だつて日本人の態度を見て、あれは悪魔的な所業だなど考えない方がいいです

ヨ」と忠告する人もいるのです。しかしながらこういう日本に対する関心が深まって来ていることの効果ははつきり現われて来ています。例えば、私が東京に着任した4年少し前にはほとんどのドイツの学生とか教授は日本の大学に来ているということはなかつたのですが、日本政府の奨学金のおかげもあるのですが20数人ものすでに博士号を持つたドイツの自然科学者達が日本の大学や研究所においてそれぞれ研究を続けていまして、日本の優れている電子科学、生科学、生命科学ということと取り組んでいます。今月末日本に来ることになつてドイツの大学の学長連合の会長さんが東京にいらした機会に、もつとどういうふうになれば日本とドイツにおける学術交流をもつと盛んにしお互いに研究の成果を挙げるができるか討論が行なわれることになつています。

今までのお話しを要約して申し上げますと、ドイツ人が日本に対する関心の度合というものはどんどん成長して発展して来て、そういう意味では、私自身は将来のドイツと日本の関係については非常に楽観的なものを感じています。いづれにしても、伝統的にありますドイツと日本にあるアンバランス、例えば日本人はドイツのことは非常に良くご存知なのですが、それに反しましてドイツ人は日本のことはあまり深く知らないというお互いの知識のアンバランスは一挙に縮まるということは考えられませんが、例えば、日本をエキゾチックな国として異国情緒のみでとらえている考え方、或いは珍しい極東の国として眺めていることはだんだんなくなつて、バランスが保たれるようになつて来ていると感じています。

今まで申し上げましたような、この今日私に与えられたテーマについてお話しをお聞になつて一寸単純に話したのではないかとお考えをお持ちの方もいらつしやるかと思いますが、テーマ自体非常に広いものですし、そして又時間的制約もありますので、それ程詳しく申し上げることが出来ませんでしたし、最初におことわり申し上げましたように、私自身個人的には私の目にふれるドイツの新聞、雑誌を通してコメントして今申し上げたわけです。しかしながら本日私が皆さんにお話ししました主目的は、皆さん自身がそれぞれお持ちになつてドイツに対する知識を基にして、そして日本で数多く出されているドイツに関する情報、新聞、雑誌や書物を通じてそういう情報をもつと分析され、お互いに話し合つていただければ非常に幸と思ひます。

ありがとうございました。

エスペラントと日独学术交流  
ウルリッヒ・リンス



Dr. ULRICH LINZ  
1943年ボン生まれ  
1973年東大に留  
学。七五年ケルン大学で博  
学博士に。39歳。



58

ドイツ学术交流会東京事務所長の五年の任期を終え、十五日帰国する。同事務所の初代所長として西独とわが国の文化学术交流に広がり、と深みのある土壌をつちかっ  
てきて、この人の帰国を惜しむ人は多いが、そのほかにもう一つの大きな足跡を残して、帰る。  
戦前にわが国で発行されていた特高の弾圧で終刊したエスペラント語の反ファシズム誌『デンボ』を、オランダ・ハーグ市のエスペランチスト、テオ・エンク氏から

入手してわが国のエスペランチストにわたらし、昨年、この雑誌全号六十六冊を復刻させた功労者なのである。九、十両日、同誌の復刻を祝い横浜で開かれたエスペラント関東大会では、とくにこわれて、別れのあいさつをした。  
「私とエスペラントとの出会い  
は、ギムナジウムの生徒だった十

五歳のとき、エスペラント語で書かれた中国の記事を読んだのがきっかけ」エスペラントは世界共通の言語。全く未知の国でもエスペランチストの住所、氏名がわかっているれば、そこへ訪ねて交流出来る。そのいふ経験を昨年、中国で出来たのはうれしかった」  
ケルン大学で歴史学と政治学を専攻。学生時代の一九六五年、日本で開かれたエスペラント世界大会に参加したのが初来日。このときペンフレンドだった当時上智大生の昭江夫人（三）とも初めて顔を合わせる。その後、東大経済学部に留学して日本の国家主義について研究したが、七五年にはエスペラント語について書いた『危険な言語』を岩波書店から出版。根っからのエスペランチストなのである。だから、こう言う。  
「日本での仕事で色んな分野の人々と知り合いになれた。が、エスペランチストの友誼が一番深い」と。  
(本間 義人)

昭和58年7月14日付 毎日新聞に掲載されその  
当別冊の浜中さんが提供してくれました。

第46回北海道エスペラント大会  
における講演録(要約)

国際関係における言語問題について

(講演者) ウルリッヒ・リンス

(通訳) 児玉 広夫)

私達は、今日ほど国際問題と深く係り合つて生活している時はないと思います。常に地球上のどこかで国際会議が開かれ、また、衛星中継によつて世界のどんな片隅の出来事でも知ることができます。それに観光目的で年間数百万人を越す外国旅行者が出ています。

しかし、こうした国際関係との係り合いも、国によつて大きな差異が見られます。例をあげると、国際会議において強大国は政治的、経済的を問題について常に国益を考えつつその役割を演じているのに対し、弱小国は会議に参加することだけを甘受しなければなりません。それは個人の場合も同様です。工業発展国の人々は、持てる知識を積極的に駆使して世界のあちこちを駆け廻るのに対し、第三世界に住む人々は、その地に束縛され、外から入る情報を消極的に受け入れるだけに留まっています。

このように国際関係における不平等は、厳然と喙をきかしており、それも未だ数多くあるという現実です。

今日は、そのうちの一つ、言語問題についてエスペラントにも触れながら、お話しをしてみたいと思います。

国際関係における言語の平等性の確保については、民主主義の原則に照らして、当然に支持され、異論のさしはさむ余地は無い筈ですが現実にはそれが無視されているように見えます。

では、何故言語問題は重要でしょうか。そうした論議に入る前に、いろいろとあるたくさんの国際的な組織で、言語状況はどうなっているか。その結果として現在どのような動きになつているか、をお話するのが順序かと思ひます。

しかし、国連や欧州経済共同体における言語状況、即ち言語のパニック状態については、皆さん方、いろいろのエスペラント雑誌等によつて承知していると思ひますので、それを省き、要するに、今、世界の言語問題について、従来見られなかつた変化が現われつつあるということを述べたいのです。

国際会議等で用いられる言語，それは英語のほか強大国の言語ですが，これらの言語は今や世界的な規模でしつかりと根を張り，中小諸国の生活分野にまで執ようにくい込んでいるということです。これに対し中小諸国は，民主主義思想の目覚めとともに自国の言語の尊厳性を自覚しつつありますが，強大国は中小国の民主政体を支持するといいつつも，言語の侵略性については目を覆っているのが実態です。

さて，言語の平等性を保持する願いは，他方において円満な国際関係を維持する願いと衝突します。もし，150国余も加盟している国連において，すべての国の言語を使用したならば，どのようなパニック状態となるか，想像するだけでも大変なことです。

現在，国連では7つの言語が公用語とされていますが，他の数ヶ国から「自国の言語にも同様の特権を与えよ。」と要求され，関係者は更に膨大な経費がかさむばかりか，国連そのものの活動が麻痺状態に落ち入るのではなかと，頭を抱えております。また一方，弱小国からは，自国の言語で討議に参加したり不満の表明もできないことで，当然のことですが，差別意識を持つています。

こうした言語問題は，ひとり国際機関だけでなく，学校教育の研究機関でも起つています。西欧では，も早や英語だけでは不充分であるとの認識から，他の数ヶ国語も学ぶべきであるという意見が台頭してきており，また幾つかの国の政府は，少なくとも隣国の言語は学ぶべきであると提唱しております。しかし実際問題として，隣接している国との政治体制や言語政策を異にしている実態もあることから，その実現性は乏しいといわなければなりません。

最近，「世界の言語状況」と題して，誌上等で熱心な討議が繰り広げられていることは喜ばしいことです。そしてこれ等の人は，国際間における言語状況について憂いを共にしている点では，不思議なほど一致しておりますが，一歩進めて，それならばどう解決するかとなると，いつものことですが，論議はそこで止つてしまうのです。何人かがラテン語が良いといいますと，それは少数のエリート集団を益するものだ一笑に付されます。更には，新型のミニ・コンピュータ言語はどうかといひ出すと，これも専門家の「未だ実現不可能」という意見で退けられています。もちろん少数意見ですが，エスペラントの採用を取り上げてもあります。エスペラントは既に90年余の歴史を有し，根本的にはすべての言語の平等性を保障するものであり，第2言語として学ぶ価値があると主張します。



では、何故エスペラントの採用が決定されないのでしょうか。それはエスペラントに対する知識の不足と偏見が根強く残っているからです。例えば、人工語 (artefarita lingvo) は、生きのびることはできないとか、エスペラントは、他の国の言語を押し退けようとしているなどと……。私達はこれに反論することは容易ですし、また事実、かつて言語学者の間でもこうした意見を吐く者もいましたが、最近はずがにこれを繰り返す言語学者はいません。

しかし、私達エスペランチストにとつて無視できない、つまり容易に反論することのできない反対意見があります。

「エスペラントには文化的背景がない」というそれです。

私は、この意見には重要な意味が含まれていると考えます。といたしますことは、世界はいま著しい工業技術の発達により画一的な方向に進んでいるという認識で、これを打破しようという運動が起つています。そしてエスペラントがその画一的な方向に力のかすのではないかという警戒心です。

エスペラントには文化の背景がないから、人間の繊細な情緒的感じを表現することだけできないという意見には同意しかねますが、ただエスペラントには、民族語のようにその背景に潜む強い連帯感はないということには同意しないわけにいきません。

民族語は、古くから受け継がれたその民族の文化的所産であり、その点、エスペラントは弱い立場といえましょう。しかし、  
“エスペラントには世界的連帯感が内包している”ということができません。

世界は今、技術的、経済的、政治的な事柄が国際化<sup>へ</sup>と進みつつありますが、何故それと呼応して人間や集団の中に世界連帯感が育たないのでしょうか。現実を観察すると、

- 1.) 観光目的の外国旅行者がおびただしい数に増えても、異国情緒を楽しむことに主眼がおかれ、その国の人々とぢかに接して国際的な視野を広めようとしない現状
- 2.) ユネスコが大々的に宣伝している新しい情報伝達システムについても、情報網の効果的な活用に主眼がおかれ、個々人が友情を深め合うために活用することは、およそ縁遠い現状
- 3.) 各国政府は表向き国際協力を謳い上げつつ、その実は外からの影響遮断に狂奔し、国民に伝える情報は一方的しかも片寄ったイデオロギーに紛飾して流している現状等々。

を考へ合わせると、非線的になつてしまふのです。

- ◎ 国民の日常生活は、緊張から解きほぐされたものでなければならぬ
- ◎ 各国との平和共存は、国民相互の友愛精神があつてはじめて可能である
- ◎ 世界連帯感を生む共通の感じ(komuna sento)は、今強く求められている

このような良識は、残念ながら未だ世界的規模で育つてはおらず地球上の片隅でひそかに息づいているのが現状です。

「世界連帯感を生む共通の感じ」これこそエスペラントに内在する文化の源泉ではないでしょうか！

それぞれ政治体制の異なるかつての権力者ヒットラーとスターリンがエスペラントを「危険な言語」とみなして、全人類の連帯を希望する多くのエスペランチストを迫害し、死に追いやるといふ悲しむべき出来事がありました。が、(も早や二度と繰り返されることはありませんが)それでもエスペラントは生きのび、たとへその進展ぶりが緩慢なものであつても、エスペラントは世界連帯感を育てるのに役立つ言語であるという理解が広まりつつあります。更にいいますと、エスペラントは

- 1.) 国際交流を容易にする
- 2.) 民主的な文化多元論を尊重している
- 3.) 言語の混沌状態を解消する
- 4.) 各民族語の平等性を保障する

〜という理解が得られつつあるのです。

そうはいつても、人種をこえて人間が人間を理解し合うところに世界連帯感を生む源があるという良識は、未だまだ不足しています。

アメリカの言語学者マリオ・ペイが数年前、誌上で指摘したことをここに紹介したいと思います。

「各国政府は国際語に好意を示さない。それは、国際語の普及により今まで政府が為してきた国民の行動規制を困難にすると恐れるためである。どの政府も公式では国際主義の精神に好意を示すが、それを真に支持する政府は少ない。」と

私達エスペランチストは、致しそ未だ少ないが、世界連帯感を育てるパイオニアです。多分これからも、一度ならず悲観的な思いをすることがあるでしょうが、私達は進歩的な国際人であるとの自覚を持ちつつ、一歩一歩前進して行こうではありませんか！！

(終)

エスペラントが役に立つのはどういうことで  
役に立たないのはどういうことか？（要約）

J E I 広報部長 梅 田 善 美

私の今日のお話しの基調を、この大会を記念して発行された H E I 所蔵のエスペラント文献目録のはじめに三沢教授が「社会全体が合理主義、実利主義を最高価値としているなかで青年たちが夢や理想や未来を語らなくなりつつあります。夢や理想や未来を語らぬところにエスペラント運動はあり得ません。」と言つておられことをお借りして、このテーマで話しを展開してみたいと思います。

世界には合理主義と実利主義の傾向があるのは確かなことです。

エスペラントは実利主義、実用的ではないのでしょうか？ エスペラントによつて金儲けは出来ません。だから、実利主義、実用的でないとは考えてはいません。

たしかに青年達は夢や理想は語りませんが、未来については何らかの考えは持つていると思います。

私たちエスペランティストは未来に夢を持っています。

自己紹介のなかで皆さんは何十年もエスペラントを学び続けているとおつしやいました。何十年もエスペランティストとしているのは何故でしょうか。エスペラントの何にひかれていたのでしょうか。エスペラントが好きだということは何かの利益につながるのでしょうか——違いますね。エスペラントの持つ理想にひかれていたためではないのでしょうか。

理想は常に何らかの力を私たちに与えます。だからこの理想を広めるために動らいたり、支持したりすることができるのです。

このことがエスペラントが役に立つことの一面なのです。

エスペラントは世界連帯感を育てているとリンズ氏がさきの講演で言及しました。エスペラントは固有の文化知識を持っていませんが、各民族間に世界連帯感を育てます。これがエスペラントが創造された一つの理由でもあります。

「知識は力なり」と言われています。

私達がいろいろな知識を得ることは自信につながります。エスペラントを使つていろいろな知識を得ることは容易なことです。また、エスペラントを使うことによつていろいろな利益を得ることもできます。

私はその最たる者の一人でしょう。度々海外旅行をし、いつも外国のエスペランティストの助けを借りて随分利益を得ています——金銭的なものではありません——。いろいろな知識や仕事の上で計り知れない利益を得ているのです。

エスペランティストは世界各地でお互いに助け合うことができます。

私達エスペランティストはこのような素晴らしい環境にあり、エスペラントの持つ有用性を利用することができるのです。

かつての U E A 会長ラベンナーが

—— malgraŭ esperantistoj esperanto tamen progresas ——

と皮肉つたことがあります。どういうことかおわかりでしょうか。

エスペランティストは仲間内で非難し合ったり口論し合ったりしてエスペラントの不利益につながることをしている。一般大衆がエスペラントに興味を持ち、エスペラントとはどういうものか、また、新しい知識を得ようとして講習会に来たとしても、先聲のエスペランティストや指導者達がこういうことではエスペラントに対する興味を失ってしまうでしょう。この意味ではエスペラントは役に立たないものでしょう。それでもエスペラントは発展します。エスペラントは人類にとって有用なものであるから……。

ザメンホフは第 2 回世界大会の演説の中で「エスペラントが単に商業目的だけに使用されるならば、私は胸の緑星章を投げ棄ててこの場から直ちに立ち去るでしょう。」と言っています。エスペラントはどんな目的に使用されても良いのですが、創始者としては、言葉は人類相互理解の手段であるから、エスペラントは人類の理想のため役立つことを望んでいます。リンス氏もこのことを結論づけました。

エスペラントには国際連帯感が満ちていて、世界の人達が知識を交換し合い力とすることができるのです。ここにエスペラントの重大な有用性があります。

( 1982, 8, 8 第 46 回北海道エスペラント大会にて )

( 北 島 瞳 訳 )

1982.10.05. 星田 淳

第42回北海道ESP大会(1978年9月23-24日、苫小牧)に参加し、今まで伝えられていなかつた北海道の戦前の反体制ESP運動を語つた S-ano 朝井は1982年9月16日、苫小牧市矢島病院で死去した。戦前函館でのESP運動、社会運動、戦中のボルネオ生活(島流し)、戦後の道内各地(函館、釧路、札幌、苫小牧)の生活・・・と波瀾に満ちた一生だつた。

彼が最後に暮した養護老人ホーム陽明園(苫小牧市植苗)の園内誌「陽明園だより」から彼の句、文を紹介する。

まず最後の文。これは死の一月前、8月発行の第7号(1982-8-7号)にある。(以下人名敬称略)

※※※ ※※※ ※※※

命賭けの一句

この一句の出典を私は知らない。案外この一句を教えてくれた先輩の創作かも知れない。一句が私に与えた影響は大きい。その一句はエスペラント語で

Por la amo mi donas la vivon,  
sed por la libero mi oferas  
eĉ la amon.

愛の為なら命を与え、だが自由の為ならその愛さえも捧げます。  
拘置所で覚えたこの一句は、私の生涯を左右した。

※※※ ※※※ ※※※

この一句を教えてくれた先輩は、朝井の言によれば当時函館での同志だつた大和床祐である。この人も今年8月12日、朝井に一月先立つて世を去つた。

この一句の出典は、ハンガリーの国民詩人として尊敬されている Sandor Petöffi だろう。民族の独立のための斗いで戦死する2年前(1847)の作品。原文を次に示す。

La amo kaj liber' :  
plej karaj sur la ter' !  
Mi por mia am' oferas

vivoflamon,  
mi por la liber' oferas  
mian amon

(訳 K. Kalocsay)

大和—朝井の伝えたものは簡単になつているが本筋は変つていない。むしろ、わかりやすくなつたかも知れない。ハンガリーから出たPetöffi詩集 LIBERO KAJ AMO 125ページに出ている。

朝井の陽明園入居は1979年10月。1980年から出た園内誌の第1号から彼の句が出ている。

1980-7-1号 敗戦を終戦といふ含められ秋暑し  
歩行器の寄り立つ窓の暖冬や

1980-12-2号 九月誕生者の言葉 色は赤です (これはヒント〜これによつて各人が思いついた事を書く - 星田)

赤い大きな旗 朝井喜一郎  
(ほかに俳句) 老友の訃告げられし朝 夏果てぬ  
おとがい蛇追う友に 夏むごし  
きな臭し 福祉後退 夏めぐり来る

1981-3-3号 余寒まだ 浅き眠りや 春の夜半  
寝ねかねて 眠りは浅し 春いまだ  
四季観く 方九尺の 窓のある

1981-7-4号 朗報今夜こそあるらし さえ返る  
敗戦や 夢まだ半ば 多喜二の忌  
多喜二忌やデスマスク彷彿と夢

1981-12-5号 雪霏々と絶えざる悲しみ降り積む  
雪紛々悲しみに絶えず夜もすがら

※※※

※※※

※※※

1982-3-6号にはこれまで常連だつた彼の句がない。この後、園内誌の編集にあたる同園職員 相馬次郎(苦小牧ESP会でESP.を学んだことがある)が、「今度は書きなさい」と約束させ、出してもらつたのが、俳句でなく短文、冒頭の「命賭けの一句」で絶筆となつた。

9月17日陽明園で園関係者と親族によつて仮葬儀が営まれたが、生前から白菊会に登録していたため遺体はその後真ちに車で北大へ移された。

ossaka

S - r o 小坂 隼二のおもいで

(Esperantistoの対社会発言について…)

星田 淳 ( 苦小枚 )

J E I (日本エスペラント学会)の創立者、E S P文法の大家、日本E S P運動の父…といわれたS - r o小坂。 文法学者とつつしんで話してみると、異に気さく、大会の時は青年の前でpornografiaj rakontojをみごとな話術で上品にやる、あらゆる面でtalentuloだつた。

だが、もう一面のidealistoだつた彼を、この頃思い出す。「平和のためにたたかわない者は、エスペランチストでないと思います。 エスペランチストなら平和を守ると宣言するのは当然です…」これは32年前の彼のことば。 場所は名古屋市東区役所講堂、1951年9月23日、第38回日本エスペラント大会でのこと。 その前年には朝鮮戦争がおこり在日米国軍は連日日本の基地から出動、北九州の空は、終日米軍機の爆音にみたされ、対島には連日朝鮮からの砲声が響いていた。 米軍司令官マツカーサーの指令で日本の再重備は始まり、当時米軍基地で働いていた私は、米軍将校から「今、新日本軍(警察予備隊~~今の自衛隊の前身)に入れば、将来幹部になれる。入れー」とすすめられていた。 身近に戦争の危機を感じていた名古屋E S P会が「平和憲法擁護」の宣言を提案、審議中のことだつた。

いま教科書問題につづき、中曽根首相の「不沈空母」など戦争準備的発言があいつく時、かつてエスペランチストが社会に対してこう宣言したことがあつた事を思い起してもいいのではないか、また意義あるのでないかと思う。

## 第38回日本エスペラント大会（1951, Sept.）

### 平和宣言（要約）

……ザメンホフの精神に生きるわれわれエスペランティストは  
第38回日本エスペラント大会の名のもとに次のごとく宣言する

（1）われわれは更に一層の力と献身をもつてエスペラント  
の普々に努力し、戦争拋棄を宣言した日本国憲法を守り、世界  
の国民に「憎しみをすてよ、武器を捨てよ」と呼びかけて、世  
界平和の実現を促進することを誓う。

（2）日本が速やかに世界のあらゆる国と平和な友愛關係に  
復帰することを希望し、諸国民の自由な交歓をさまたげている  
現在の國際關係が清算されるように、エスペラントを通じて努  
力する。

-----  
上の第2項はまだ連合軍の占領中、冷戦の対立きびしい時代を反映して  
いる。

なお、この翌年、京都での第39回大会では、学生グループから徴兵反  
対署名運動を提案すると予告されていたが、実際には「平和憲法擁護につ  
いて」の提案となり、具体的には原爆被害写真、文集（「原爆の子」など）  
のESP訳されたものを海外へ送ろうとよびかけ、賛成多数で可決されて  
いる。反核・軍縮は戦後 ほど近い頃から、日本のエスペランティストに  
とつて身近な問題だつたといえよう。



サンフランシスコ州立大夏期講座に参加して

小林 貴美子 (札幌)

7月8日午後4時、羽田空港出発、同8日朝9時 サンフランシスコ空港到着。税関で1時間、初めての海外旅行で、しかも一人旅であつたため、極度の緊張感で、食欲は全く無く一睡も出来ず、頭の中がぼんやりと震がかかつた感じで、空港を一步出ると、上背のある立派な体格の年配の男性がニコニコと笑い乍ら、ESPERANTOと緑で書かれたプラカード(afiŝo)を高々と振つて出迎えて下さつた。

14年前にサンフランシスコ州立大学に1,500ドルを投じて講座を開講させた75才になられるシュルツ氏その人であつた。

横づけされた乗用車の運転席には、弘前で3年間、英語の教師をなさつたS-inoドーリが、暖かく迎え入れて下さつた。

時速100キロ近いスピードで、車窓を流れ去る風景よりも、まぶしいばかりに真青に晴れ渡つた空が、実に印象的であつた。道路幅が広く、一方交通で、日本の様に車が渋滞することなく、スイスイと20分ぐらいで、待望のSANF.大に到着、3階の端から端までが窓といつた明かるい校舎が、私の学ぶ文学部であつた。

無事着いたという安心感と、初めてエスペラントのみの生活という不安が、もうろうとした意識の中で交錯する。午前中は上級クラスでvizitantoとして出席、先着の梅田先生と北畠さんの顔だけが目に入る。「無事着きましたね。」という梅田先生の言葉に張りつめた気持ちも緩み、胸が熱くなる。皆んなに紹介されたが、その時の言葉は残念乍ら記憶にない。

睡魔を振り払い乍ら、やつと授業が終り「これからは毎日この道を通うのよ。」と北畠さんから「ここが生協」「ここが食堂」とすべて独立して離れて建つている建物を教えられ乍ら、軽い山坡を15分程度歩かせられ、やつと宿舎であるベルデツチホールにたどり着いた。休む間もなく別館の食堂へ行き、再度寮へ戻つて、道具を持ち、又坂道を登つて教室へ。午後には中級のクラスAとBで受講し、

午後4時過ぎに授業を終え寮へ戻る。夕食は食堂で17時から18時30分まで、サマータイムのため日没が20時半頃。外国え来たという異和感が全く無く2人部屋の室内も、ホテルとまではいかないが各自に机、椅子、整理ダンス、ロッカー、昼はソファ、夜はベットで結構ゆつたりした感じであつた。かくして2週間のサンフランシスコ大学の生活が始まつた。

ESP夏期講座の参加者は、日本人8名、中国1名、スイス2名、オーストラリア4名、他に usonano で総勢約70名、皆とても心暖かく、親切で、陽気である。授業も大変楽しく、ピロン教授(ジュネーブ大)が英語で話す部分以外は、だいたい理解出来、アツという間に時間が過ぎる。日本の学校教育も、このぐらいリラックスして楽しければ、落ちこぼれが少たいであろうにと思つた。

9才から88才までの老若男女が、何ら異和感なく共に学び、しかも帰りの機内で、著名な大学の教授が12名も共に学んでいたと聞き、驚きに目をみはる。

梅田先生の講義も、日毎に人気上昇、ピロン教授の授業を抜け出して聞きに行く人が増えて来たのにも驚いた。

私達がサンフランシスコの地名を知っているのに対し、usonano j で札幌市を知っているのはまれであり、北海道は日本の北の端で、東京は本州に在るといふ程度の知識である。何よりもうらやましく感じたのは、彼等のバイタリテイと豊かな感受性と表現力である。

夕食後のひと時、ホールで、太平洋に沈み行く夕陽を眺めながらギターを引く人、フルートを吹く人、合唱、(勿論エス語で)ダンスといつとはなく人の輪が出来、9時過ぎまで興じ、実に楽しげであつた。それが終ると廊下、あるいは自室で、午前2時を廻る頃まで、談笑が続き、それでいて翌朝6時半にはシャワーを浴び、身づくりをする隣室の usonanino j、私は情けないことに、宿願、予習、ハガキ書きに追われ、ドア越しに聞くか見る程度、明日の授業を考えると余裕が無いのである。

帰国して振り返つてみると、色々と反省の種はつきない。

それにしてもシュルツ御夫妻の温情味あふれる気くばり、エスペランティストとは、かくあるべきかと、深く考えさせられ尊敬の念を抱かずにはいられず、到着の翌々日の日曜日のパーティの送迎から始まり、私達が帰路につく日のサンフランシスコ空港の見送りに至るまで、すべて御夫妻が欠けることなくお世話下さいました。

最初の週末の日曜は、シュルツ宅のĜardena Festo、翌週の土曜日は午前11時に寮を出発、一週間遅れて参加した私のために、御夫妻の2台の車でSan F.市内の観光めぐりをして下さり、翌日曜日は、San F.のESP会を見学し、場所を変えて、インド料理とハーモン夫人の御地走でパーティが開かれ、寸劇、歌、演説等を楽しみ、夕刻からは、サンフランシスコ湾が一望出来る高台の高級住宅地に在るハーモン宅で、テイパーが催され、暮れ行くひと時を、正に人種の垣根を越え、Doktoro ザメンホフが切望した通りに十分をamikecoとfratecoが生まれ、寮へ帰り着いたのは午後22時を廻っていた。

外国に出て初めてエス語の真の価値を知り、授業においても、初級、中級、上級共に対等に公正な立場で学ぶことが出来、中級クラスでは、「裸足のゲン」のエス版で「原爆について」と「戦争と平和」について共に語り合い、上級クラスでは部厚い日本文学から心理学まで、幅広くエス語による学習を成し、十分にエス語が機能を果し得ることを知り、実に得がたい体験をする事が出来ました。

今、すべてを段取りして下さいました梅田先生と、常に叱た激励して下さいました北島さん、それに主婦である私に2週間の自由を与え参加させてくれた娘と主人に心から感謝し、立派に一歩前進して、入生を歩みたいと考えております。 勿論、エスペラントと共に！！

(次のページに掲載の写真はシュルツ氏と寄稿して下さいました小林さんです。サンフランシスコ空港にて・Red.)

本年9月7日(水)  
北海道新聞朝刊の「読者の声」欄に掲載のもの。  
「大韓機撃墜に思う」という見出しのすぐ傍にのつていたので、効果はてき面か!

昭和58年(1983年)9月7日(水曜)



## エスペラント語 講座でいい経験

主婦 小林貴美子

(札幌市中央区・48歳)

三年前、本紙でエスペラントの講習を知り、老化防止にと学び始めたのがきっかけで、第十四回サンフランシスコ州立大学のエスペラント夏期講座に参加し、エスペラントによる国際交流で得難い体験をすることが出

来ました。

七月四日から七月二十二日までの約三週間、参加者約七十人、南はオーストラリア、北はカナダ、日本からは八人が参加しました。初級、中級、上級に分かれ、講師はジュネーブ大学の主任教授と、日本エスペラント学会のお二人で、講師、生徒相互が実に真剣で、しかも笑いが絶えないユーモアあふれる授業風景で、午前、午後、通算六時間の授業が、おしいほど早く終わっ

てしまつてしまいました。

キャンパス内の十五階建ての近代的な宿舎の十四階全部をエスペラントで使しました。食堂、教室は別棟のため、キャンパスの端から、端まで、真っ青な空の下、美しい木立や芝生を横切り、日に何往復かするのために、約五キロは歩かねばならなかったのに、持病のアレルギイもどこかへ消え快適な毎日でした。

中級では「裸足のゲン」のエスペラント版で、広島の原爆、第二次世界大戦について、当時をしのびながら胸を熱くして共に語り合い、上級では「日本文学」経済「心理学」と幅広く、エスペラントで講義、質疑応答がなされ、人工語のエスペラントが立派に機能することを学びました。

夕食後は十四階中央ホールから湖の向こうの太平洋に沈む美しい夕日を眺めながら、読書、ギター、合唱、ダンスと交流の輪が広がっていく。週末は市内観光、ガーデンパーティーと国際語による人種の壁を超えた温かい心のふれ合いを体験できました。

エスペラントの歴史は書き改められなければ  
ならない！！

ONI DEVAS RESKRIBI  
LA HISTORION DE  
ESPERANTO!

～独占～感動的：モナート社はザメンホフ博士の陰れた日記帳を発見～

EKSKLUZIVE-SENSACIE: MONATO trovis la sekretajn  
tag-librojn de d-ro Zamenhof !

(翻訳者) 児玉 広夫 (札幌)

月刊総合誌のMONATOについては、同誌編集長シュテファン・マウル氏が1昨年・来日、関東、関西、九州地区を講演旅行し、その講演録がテープと共に名古屋エスペラントセンター出版会より発行されたことで、御存知の方も多いと思います。

「モナート」の本年6、7月合併号のSATIRO DE L'MONATO 確に上述のような～エスペランチストの耳目を疑わせずにはおかない～センセーショナルなタイトルがのつていました。

その内容を以下に要約しますので、是非御一読くぞさい。そして読み終えましたなら、もう一度 "satiro" の言葉の意味を考えてみてください。 Ĉu fikcii aŭ nefikcii tio dependas de via juĝo.

ドイツの雑誌ステーロがアドルフ・ヒットラーの日記を10年がかりで、やつと探し当てたということで、世界的に一大センセーションをまき起したことは周知のとおり。(事實は歴史学者により偽作と判明…訳者注) モナート社も、自らの手で探しあてたザメンホフ博士の1,000冊にも及ぶ日記帳をいつまでも、しまい込んでおくことは耐えられずあえて世に公表する次第…との書き出しで～その発見者は同社の通信員、才智にたけ、粘り強くそして天才的ともいえる足跡探險家・ネニ・トロンペートその人であり、秘匿されていた場所は、ワルシャワとピアリストークを結ぶ鉄道沿線の小さな村…といささかミステリーじみた調子で書かれており～この日記帳がまさしくザ博士自ら記したものでどうか、その証拠づけを未だ歴史学者や Esperantologo その他の専門家に鑑定依頼はしていないが、今迄その存在すら知らずにいた日記帳を近く複製し出版することを決定した…として以下のように発見

に至る経緯が記されている。

トロンペート氏がザメンホフの日誌の存在を初めに知つたのは、中国を旅行中の時であつた。中国のベテランエスペランチスト(その人の名は未だ公表することはできないけれども)が蒙古のSin Kašoという小さな村落で、彼に1913年の日付のザメンホフの葉書を見せてくれた。それによると、ザメンホフは中国エスペランチストに、ピアリストークへ向う汽車での旅で、大事にしていた日誌類を失くしてしまい、余りの己れの不注意さに叱じている、と打ち明け、どうかこのことは内緒にしてください、と頼んでいる。トロンペート氏はこれを見て、まさしくザ氏によつて書かれた真正なものと確証するに至つた。というのは、この葉書は珍らしい程一点の誤りもなく、しつかりした文で書かれていたからである。

さて、事の始まりは1944年である。トロンペートは、MONATO社から支給された必要な分の資金を携えて、ポーランドへ探険に旅立つた。そして問題の鉄道線に沿つて6年にも及ぶ長い踏査のすえ、実際に彼はある小さな村(この名は未だ公表することはできないが)の線路沿いでまるで埋合の物体を掘り出したような形跡の、くぼ地を発見した。彼はとつさに、ひよつとして例のなぞの日記帳の入つた包物がここにあつたのではないかと推量した。その後幾度も回を重ねて調査の結果、彼は遂に、ひとりの農夫を探しあてた。事実、農夫がその包装物を発見していたのだ。彼の記憶によれば、発見した当時は、まだ10才の少年で、きれいなプラスチック製の品が気に入り、書物類は読むこともできず、どこかに隠したとのことである。少年は、そこに書かれたものは秘密な、どこかのスパイの物ではないかと考えたとのこと。そしてこの哀れむべき農夫は、エスペランチストにとつて何物にも代え難い宝であるそれをどこか埋めたか、も早や思い出せないというのだ。

それからややたつて、トロンペートにも思わぬ好機が到来した。それは悪名高いシベリアから西ヨーロッパへ通ずるガス管の埋設工事が進み、たまたま工事中のロシアの一労働者によつて、油紙の包装物が発見されたのだ。労働者はそれを開いて、とてつもない大事な物を手にしている己れの立場に気づき、早速地元の国家保安委員会-KGB-(ここでは、La loka komisaro de Komitato de l'Granda Bluvoと記述されている・・・訳者注)に知らせた。数日後、この日記帳はKGBのエスペラント部の長の机上におかれた。KGBでは長い時間をかけて、これをどう処理すべきか協議が重ねられた。この日記の中に「反ソ的を言辭は

どこにもなかつたので、これを葬り去る理由もない、それでは、これを何か役に立てることはできないものかと。

そうした折、幸いなことにレーガンという人物が現われ、シベリアから西欧にガスを引き入れることに反対するといひ出し、ソ連としては新たな対応に迫られていた。KGBエスペラント部のペトウロ部長はモナート社の探険家トロンペート氏が、日記帳を探し出すために大変な苦勞をしていたことを良く知っていたので、これを(西側陣営の)モナート社に提供することを思い立つた。

トロンペートは早速モスクーに出向き、ペトウロの求めに応じて、1,000億ドルの紙幣を彼に渡した。骨の髄までエスペランチストであるペトウロは、この緑の宝物を彼に渡すときは激しく苦痛に悶え、泣き出したほどであつた。このようにして、モナート社は偉大なザ博士の日記を所有することになつたのである。

…以上のように発見の経過を面白く書いているが、続いて～～この日記の初めの部分をザアート読んでみただけでも、従来から伝えられていたザメンホフの伝記がいかにか曲解され、いかにか博士の眞の姿を知らせることが少なかつたかがわかる…と述べ、日記帳の中から3点を紹介している。即ち～～

### 1. エスペラント16ヶ条の文法を考案した動機について

これけ全くの偶然である。今のエスペラントの原型であるリングヴェ・ウニヴェルサーラを考案中、ちよつと「子供遊び」のつもりで、コンピューターに諸外国の言語の共通単語を入力し、それを出力プリンターにかけてみて、このシステムの威力に驚き、今度は各国共通の文法を同じ方法で入力してみた。すると、何と不思議なことに16の文法法則だけが打ち出されて来たのだ。と

### 2. supersigno $\wedge$ の由来について

これはより滑稽な事から起つている。錬り上げた今のエスペラントによる原稿を試みに某出版社の写植機にかけてたところ、その中継部品の一つが故障して、すべてのsigno  $v$ がひつくり返つて出て来たのである。それを見て、何と可愛い小さな帽子のような形で出てきたものかと気に入つて、これを採用した。…と風刺的に述べている～

### 3. Interna ideo (内的思想)について

それは数人の友達と、母親手製のケーキを食べながら、新しい言

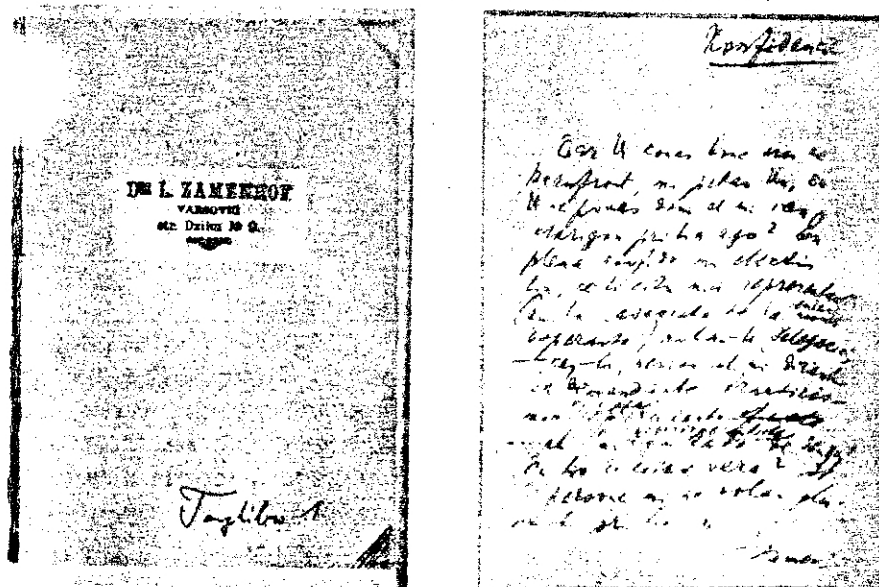
語の誕生を祝つていたとき、一人の友が懐疑的に「情感の伴わない  
 こういう機械語は、成功するだろうか。」といつたのに対し、ザメンホフ  
 は「言語の内的思想、これがこの言語の持つ論理性だ。」と反駁した。  
 しかし、これを聞いた他の友達らは同時に口を開いて、

“Tio estas la interna ideo!” と叫んだ。と

・・・三つの事例を紹介した後、モナートは近い機会に、未だ知られて  
 いない多くの部分を逐次、紹介する企画のあること、また独りモナート社が  
 占有するという考えはなく、エスペラント雑誌の Heroldo, Fonto,  
 Horizonte などにも、然るべき値段で買いつつもらつていること、  
 将来は、これをウイーンのエスペラント博物館に出すことも考慮している。  
 という文章で結ばれている。

なお、読者に迫真性を持つていただくために、一部複製して次に紹介します。

(発見した日記帳の一つとして縮小掲載されたもの)



Jen, en reduktita grandeco, la kovrilpaĝo de la unua tag-libro de Zamenhof; la kartono de la kajeroj estas verda, escepte de libro 99, kiu havas flavan koloron (la kialon ni ankoraŭ provas eltrovi). Apude, ankaŭ en reduktita grandeco, faksimilo de la unua paĝo de la unua taglibro; supre oni klare povas legi la vorton „Konfidencie”; tiun indikon Zamenhof metis en ĉiuj mil taglibroj sur la unua paĝo. Bedaŭrinde, kiel oni rimarkas, malseko iom jen kaj jen difektis la skribon; tamen, feliĉe, oni preskaŭ ĉion povas deĉifri.



相 沢 治 雄 (札幌)

(4) La Norda Krucio

1931年から1933年まで6回発行されている。渡部隆志先生の個人誌である。渡部隆志先生はHELの創立当時、非常な活躍をされ現在まだまだお元気である。先生はクリスチャンなので、キリスト教についても記事があるが、バハオラの長子、アブドル・バハ(1844~1922)が、天の啓示を受けて創設した宗教、バハイズムにも興味を持たれ、丁度1934年英国のバハイスト、アグネス・アレキサンダー夫人(Fino?)が山部で行なわれた、第1回北海道エスペラント大会に出席し、バハイ教の講演をした。この記事は数回書いておられる。その外、先生の専門の公式水理学(Formularo por Hidraŭliko、1933年7月の修学旅行の思い出も貴重な資料である。

(5) Hokkaidoa Esperantisto

Hokkai Centro de Esperanto Propaganda Asocio

1934年中に3回発行されている。

(2)の Norda Brilo が前述のとおり「北光」のノ部に活版印刷となつたので、その代りに発行したものらしい。高田屋嘉兵衛の伝記がエス文で連載され、その他、大本の記事があるだけで、特に目立つたものはない。

(6) La Urso

LA ORGANA GAZETO DE SES

LA URSO

1<sup>a</sup> Jaro Septembro-Oktobero N-ro 3

SPECIALA NUMERO DE KONGRESOJA



Eldonita de  
Sapporo Esperanto Societo  
Sapporo Hokkaido Japanio

札幌エスペラント会

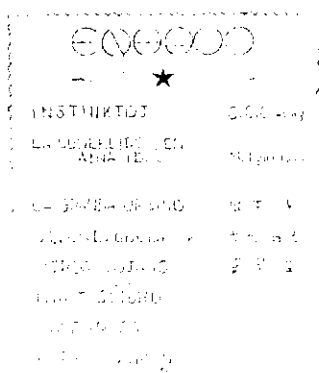
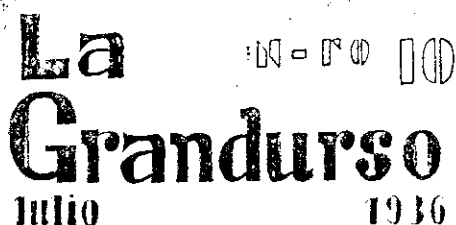
編集兼発行人 相沢治雄

1934年から1937年まで9回発行した。

Zの国際語の本質と将来を毎号拙訳で出した。この当時 Izolitaĵ membroj は札幌エス会に所属する事にしてあつたので、その人たちの投書もあり札幌エス会の最も盛んな時であつた。毎月の行事、Z祭、大会の記事はもちろん、2月/6日相沢が一

人で山の家にスキーで行き、明ノ7日前田君や札鉄の連中と銀嶺荘で出合い、皆で春香山に行つた記事もある。その他道内の植物の 에스名について稚内の佐々木君が書いている。毎号ノ5p~30p。

(7) La Grandurso



Grano cu sezonada 115

ノ1932年~ノ1936年まで、年数回、ノノ号で終り。

苫小牧エスペラント会

編集責任者 岡垣千一郎

この雑誌の地号に渡部隆志先生が地方機関誌巡礼というのがあつて、道内各誌の批評をしておられる。旭川の Fenikso は「尻に糞」とならなければよいが!? と心配しておられた。札幌の Urso についても Hokkaido という表記をしているのを排斥しておられた。(今では Hokkaido は定着している。) それでは La Grandurso をなぜ Granda Ursino としないのかと反撃した事がある。8号には苫小牧エス会創立当時の思い出を渡部先生が書いておられる。

(8) S F E R

ノ1933年~ノ1935年 5回発行 ノ5p前後

札幌倶楽部エスペラント会

発行兼印刷人 坂本栞旗

第ノ号は発行月日がないので何時作られたのかわからない。第4号には札幌エス会合同スキー登山記、第5号瀝美氏をお送りしとの記事がある。カタナイ印刷で読むのに Oni suferas するから S F E R と何かに批評が出ていた。帯広で発行していた La Verda Triumfo には宇宙一(世界一より一枚上)きたない札鉄の機関誌と悪口が出ていた。

(9) La Fenikso

ノ1935年~ノ1938年 年数回発行 ノノ回で終り

旭川エスペラント会

発行者 木津義雄

# La Fenikso

LA UNCA PATRIVINA  
MEMORIO DE FONDO



N-RO :

AS ADIGATA  
FORNANDO S. R. D.

(10) La Plinto

# La PLINTO

2



HOZVAIBO

1937年旭川で第6回全道エスペラント大会があつたので、予告、Protokoloの記事が多い。

当摩憲三の思い出の記が4号に出ている。

1935年の発行したものは日本紀元2995と記してある 渡部先生が「尻に糞」とならねばよいかと心配された Fenikso は1938年11号まで続いたのである。

1935年～1936年

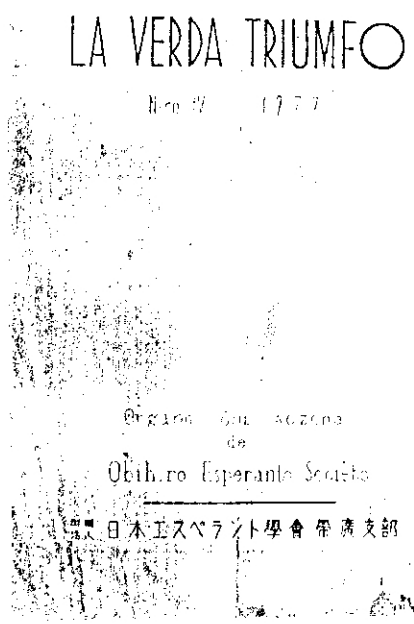
苫小牧工業学校同窓生エスペラント会  
発行者 村山治助

非常にきれいな印刷で、表紙の青写真も立派であつた。

印刷がよいのでプリントかと思つたら、これは土台石の事であつた。工業学校の卒業生のものであるから素人には向かない。

これは2号で終つた。

( 1 1 ) La Verda Triumfo



1935年~1937年 4号まで

帯広エスペラント会

発行者 菅沼 寛

3号までは手書きタイプで非常に読みづらい。イタリックで書いた所など特に読めない。ところが4号は財団法人日本エスペラント学会帯広支部となつて、東京の専門家に印刷させたので非常に立派なものになつた。4号で終りになつたのは惜しい。

以上、戦前の雑誌について概略だけしか書けなかつたが、北海道全域にわたつてエス機関誌が発行されたことは刮目にあたいする事であつた。これから先は当局の弾圧がはげしくなつて機関誌等発行する事はできなかつた。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

編集後記そのあと

いつさいの編集を終えて「編集後記」を書いた直後、横浜エス会機関誌 La Tamtamo 9月号が手元に來ました。見ると第32回関東エスペラント大会(1983-7-9/10)でウルリツヒ・リンス氏がお別れ講演をした Gis-revida parolado がのつています。今回の Leontodo N-ro 69は全く例外的なことですがESP文が無いこと、それに主要記事がリンス氏という特色を考え、La Tamtamo の編集長 土井敬和さんのお許しを得てここに掲載しました。ぜひ御一読下さいますように。

( 兎玉 ) 1983-9-9

\*\*\*\*\*

# Ĝis-revida parolado de Dro Ulrich Lins

Mi ne povus nun fari al vi prelegon pri mia starpunkto pri Japanio. Tio estas tro vasta temo. Tamen eble post mia alveno al Germanio mi pli bone povos ĵuĝi, kiom mi ĝuis en Japanio. Do, mi nun iom rakontu al vi tutsimple, kiel evoluis mia kontakto kun Japanio. Kaj tio nepre povas mem konkludi, kiel mi opinias pri Japanio ĝenerale kaj specife pri la japana Esperanto-movado.

Mi memlernis Esperanton antaŭ 14 jaroj(?). Jam en tiu tempo mi estis atentigita pri la ekzisto de Japana Esperanto-movado, ĉar la loka Esperanta grupo iam ekspoziciis ankaŭ Esperantaĵojn el Japanio.

En 1965 al mi prezentigis bona ŝanco veni al la Universala Kongreso en Tokio per la helpo de la Ministerio, ĉar post la universala kongreso mi aranĝis TEJO-kongreson en Japanio. Tiam multon mi povis vidi de nuna Japanio, kaj parolis kun junaj japanaj esperantistoj, kaj unuafoje persone konatigis kun mia nuna edzino.

Post la reveno al Germanio mi klopodis veni mem al Japanio por plu esplori la rilatojn inter la naciismoj de ambaŭ landoj, kaj feliĉe en 1971 mi ricevis stipendion por pasigi unu jaron en Japanio en la Universitato de Tokio. Mi tre ĝojis siatempe, ke mi havis la ŝancon veni al Japanio por pli longa tempo kun mia edzino kaj filino. Ĉar inter la periodo de la universala kongreso kaj tiu mia nova restado en Japanio mi multe havis kontaktojn kun japanaj esperantistoj skribe: kun s-ro MIYAMOTO Masao, kun s-ro UMEDA, kiu estis dum kelka tempo mia kolego en la estraro de TEJO, kaj kun s-ro KURISU. Kiel vi scias, tiu kontaktigo kun s-ro KURISU poste fruktigis en la traduko de "La Dangera Lingvo".

Mi do venis en '71 denove al Japanio. Kaj ĉar la Universitato de Tokio estis tre proksima al la malnova oficejo de JEI, mi sufiĉe ofte, kiam mi enuis super miaj historiaj studoj, eskapis el la universitato al la oficejo de JEI. Mi ĝuis tiujn miajn vizitojn al la oficejo de JEI. Kaj precipe mi kun respekto memoras la personecon de s-ro MIJAKE. Li ŝajnis al mi unu el

「危険な言語」  
(岩波新書)でおなじみのリンス氏のおわかれ講演。氏はこの講演の数日後に沖縄を経て母国ドイツへ帰られました。

テーブルおこしの作業は小野隆夫さんにやってもらいました。

TEJO =  
Tutmonda  
Esperantista  
Junulara  
Organizo

la plej elstaraj esperantistoj, unu el la plej diligentaj, kaj ankaŭ unu el la plej modestaj, kaj eble pro tio lia nomo en la ĝeneralaj esprimoj de la japana Esperanto-movado ne tiel ofte aperas kiel la nomoj de aliaj famaj esperantistoj. Mi multon lernis tra la konversacio kun s-ro MIJAKE, kiu antaŭ kelkaj jaroj mortis post longa peniga malsano.

Nu tamen en tiuj jaroj mi tre ofte renkontigis ankaŭ kun junaj esperantistoj. Kaj mi havis ankaŭ la sperton de la kunloĝado en Jaizu en '71. Ĉar mi mem estis aktivulo de la germana Esperanto-junularo kaj mem okazigis seminariojn precipe en la novjaraj tagoj, kompreneble mi tre scivolis pri tiu kunloĝado. Mi nun memoras mian ŝokigon aŭ konsternigon de la severaj reguloj, kiuj estas aplikataj dum la kunloĝado: frumantene ellitigi kaj purigi kaj stari antaŭ la hisata flago. Kaj des pli mi admiris la viglecon de la lernantoj, ke dum la tuta tago sen ripozo ili lernadis Esperanton kaj neniam perdis sian bonan humoron. Ankaŭ la disciplino ŝajnis al mi mirinda, el kio la dekelko ŝanĝigis poste. Mi poste lernis, ke ankaŭ tiu kunloĝado estis iniciata de s-ro MIJAKE. Kaj ĝi fakte havas grandan signifon en la senco, ke li inauguris la periodon de aktiva uzado de Esperanto en Japanio. Estas karakterize por la saĝeco de s-ro MIJAKE, ke li mem estante malnova esperantisto ĝustatempe ekkonis tiun novan tendencon.

Mia restado en Japanio finiĝis en majo '72 kaj poste mi revenis al Germanio kaj prezentis mian doktoran tezon pri la japana naciismo kaj poste mi volis resti en universitato. Sed iun tagon mi ricevis la oferton de germana servo, akademia intersanĝo. Mi longe pripensis kaj konsideris multajn praktikajn aferojn. Ĉe ni estis la fakto, ke ni tiam havis du infanojn, kvankam kompreneble ĉe ni, eble ankoraŭ pli multe ĉe mia edzino, superregis ĝojo pri tio, ke ni povos pasigi jarojn en Japanio.

Do, en '78 mi denove venis al Japanio, kaj komencis mian laboron. Dum la lastaj jaroj treege kreskis la scienca intersanĝo inter Germanio kaj Japanio. La germana ambasado ĉiam petis al sia centro en Bonno, ke ili bonvolu fari la laboron en Tokio. Kaj mi povis fondi kaj establi la oficejon. En la komenco mi havis multe da libera tempo, kaj povis ofte konatigi kun novaj esperantistoj kaj revidi malnovajn esperantistojn. Sed ju pli mia oficejo iĝis konata inter japanoj, kiuj volis studi en Germanio, des pli malfeliĉe kreskis ankaŭ la laboro de mia oficejo. Kaj unu el la konsekvencoj estis, ke malpli ofte mi povis veni al Esperan-

リンス氏は特に  
故三宅史平氏の人  
柄、造詣の深さに  
ひかれ、また焼津  
合宿の規律のきび  
しさに驚かれたよ  
うです。



taj arangoj. Tion mi tre bedaŭras. Por mi estis interese favori kun japanoj, kelkaj japanaj profesoroj, kiuj mem studis Germanion. Sed mi mem demandas min, ĉu ne mia intereso pri Japanio estus limigita, se mi estus havinta nur tiujn kontaktojn kun universitatoj, ĉar ŝajnas al mi, ke la universitatoj en Japanio estas iom izolitaj de la ekstera socio. Por mi estis stimule kaj freŝige konatigi kun la japanaj esperantistoj, inter kiuj estis profesoroj, direktoroj, industriistoj, dommastrinoj kaj laboristoj, de ĉiuj tavoloj en la japana socio. Kaj alia eksterlandano tute ne havus la ŝancon konatigi kun anoj de tiel diversaj tavoloj en Japanio. Tiajn spertojn mi dankas al Esperanto. Mi ankaŭ kun plezuro memoras diversajn arangojn. Mi feliĉe ĉeestis en la regionaj kongresoj de Hokkaido, de Toohoku kaj de Kjuŭŝuu. Ĉar ili estis iom periferiaj, la vogleco de tiuj kongresoj ne estas komparebla kun la Kantoa aŭ Kansaja kongreso. Kaj mi konsilas, se mi rajtas tion fari, al la Kantoaj kaj Kansajaj esperantistoj, ke ili klopodu iom havi la rilaton kun la periferiaj foraj samideanoj. En kelkaj tiuj kongresoj mi havis la plezuron fari prelegon pri diversaj temoj.

Ĉiokaze mi multon lernis ankaŭ pri la Esperanto-movado ĝenerale en Japanio, kaj post mia reveno mi volas konigi inter la germanaj esperantistoj miajn impresojn pri la japana Esperanto-movado. Mi mem estante for ne scias bone kiel nun estas la germana Esperanto-movado, sed mi scivolos kiel mi povos estonte kontribui al ĝi.

Tamen mi scias, ke feliĉe mi ne devas diri al vi, ADIAŬ, ĉar estante esperantisto mi strebos al daŭra kontakto. Mi ne povas nun diri, kiam mi havos denove la ŝancon veni al Japanio por pli longa tempo. Sed mi certe venos de tempo al tempo por mallonga tempo, kaj mi esperas, ke mi povos tion ĝuste fari dum la tempo de iu kongreso.

Kaj do, je la fino mi volas danki al vi, ĉiuj, kaj ĉiuj aliaj japanaj esperantistoj, al kiuj nun ne atingas miaj vortoj. Mi volas danki al vi pro via ĉiama afableco kaj pro via toleremo, kio estas unu el la plej agrablaj trajtoj de la japanoj ĝenerale. Kaj mi eble ne ĉiam povis al vi komprenigi, kiom mi fakte lernis per la konversacioj, per la amikaj kontaktoj kun vi, sed mi diras tion tute sincere, kaj tio validas por esperantistoj de ĉiuj generacioj, por la honorindaj veteranoj, por mezaĝuloj, por samaĝuloj kaj ankaŭ por pli junaj. Kaj mi ĝojas, ke kiel esperantistoj ni havos la ŝancon revidi unu la alian aŭ en Japanio, aŭ en Eŭropo, aŭ eĉ eble en Pekino. ĜIS REVIDO!



様々な階層，様々な職業の日本人と友達になれたのは，エスペラントのおかげだった，それがとてもうれしかったと，述べておられます。

## もう書きません

相 沢 治 雄

Arkivo de HBL はこれで最後です。長い間ありがとうございました。今後 LEONTODOには、特別な事がなければ記事を書きません。その理由は、30年も40年も前の事を書いてもしようがない、書くなら現在の事を書けと言われたこと。第2の理由は同じ者が書いては進歩にならない。いろいろな人が書かなければいけないという批判がある事。私はこの Arkivo の外に A H のペンネームで漫文も書いて来ました。又 LEONTODO の紙面が少なくなった事です。それに、北海道エスペラント50年史を書かなければならない新しい仕事があるからです。これは北海道のエスペラント史を新しく書き直すので沢山の資料がいます。古い事を御存知の方は是非お知らせ下さい。

~~~~~

編集後記 (お願いも含めて)

- ◎ やつと明後日、Leontodo 69号の原稿を印刷屋さんへ送りこめます。ちようど47回大会の1週間前、せつぱつまつて事が成就つてホント!
- ◎ 今号は読み応えの記事が多いと思いますがいかが? 初寄稿の小林さん、昨大会講演録を仕上げた北畠さん、シベリヤ紀行を寄せた星田さんに Aparte sincerajn dankojn! を.
- ◎ 相沢さんの「もう書きません」はショックです。古きを温ね新しきを知る貴重な原稿、まして漫文は固いLeontodoの一眼の清料剤です。寄稿者一定の感を嘆いたのがその因とすれば、お許し下さい。
- ◎ リンス氏の「言語問題」まとめるためにテープを聞いて「冷汗三斗」の思いでした。通訳の難しさとわが身の無能を嘆くばかりです。テープはすぐ消去して下さい! お持ちの方!!
- ◎ 今迄B5版規格であつたLeontodo (今号も同じ)を次号からA6版にしますので、ESP文のタイプ原稿はA6版にして下さい。別冊付録のシベリヤ紀行の大きさがそれです。これだと印刷費は同じでも郵便料金がグーンと安くなるんですぞ! 和文の方は北畠さんと私がタイプするので変りません.

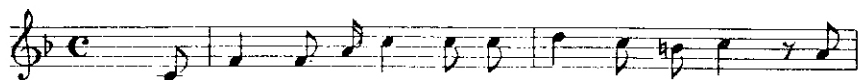
では、御気嫌よう! gis …… (児玉)

1983-9-8

La Tagiĝo

Poez. A. Grabowski

Muz. Barański



1. A- gor- du la brus-tojn, ho ni- a fra-tar', por
2. Post lon- ga mi-gra- do sur dor- na la voj', mi-
6. En ĉi- u mond-par- to, en ĉi- u ter- zon', en



no- va, pli vi- gla jam kan- to! Ĝi so- nu po- ten- ce de
na- cis nin on- ĝojde l' ma- ro; sed ven- kis ni i- lin kaj
ko- roj de cen- toj da mi- loj. jam vi- bras por ni- a sa-



men- toj al mar', a- non- cu al ĉi- u dor- man- to: Ta-
ve- los kun ĝoj' al ver- da ha- ven' de l' ho- ma- ra. Post
lu- to re- son', do kan- tas de l' te- ro ni fi- loj: Ta-



ĝi- ĝo, ta- ĝi- ĝo ra- di- as en rond', la om- broj de nok- to fer-
lon- ga ba- ta- lo, mal- dol- ĉa tur- ment', la ste- la stan- dar- do jam
ĝi- ĝo, ta- ĝi- ĝo ra- di- as en rond', la om- broj de nok- to fer-



ku- ras el mond'! Ta- ĝi- ĝo, ta- ĝi- ĝo ra- di- as en rond', la
flir- tas en vent'. Post lon- ga ba- ta- lo, mal- dol- ĉa tur- ment', la
ku- ras el mond'! Ta- ĝi- ĝo, ta- ĝi- ĝo ra- di- as en rond', la



om- broj de nok- to for- ku- ras el mond'!
ste- la stan- dar- do jam flir- tas en vent'.
om- broj de nok- to for- ku- ras el mond'!

LEONTODO N-ro 69 1983-9-10

発行： 北海道エスペラント連盟

〒060 札幌市中央区南1.西3.第4銀行7F
中央タイピスト学院内

編集局： 責任者 児玉 広夫

〒061-11 札幌郡広島町広葉町1-1-16

Tel:01137-3-0434

郵便振替： 小樽 - 17075

会費： 2,000円

La 68-a Universala Esp. Kongreso estis okazigita en Budapeŝto, Hungario. Nia japana karavano de JEI, 20 membroj, partoprenis ĝin. Niaj membroj estis s-ino Satiko Isobe, ĉefkomitatano de JEI, d-ro Sumiyosi, Hamamatu, Prof. Kuwahara, Osaka, instruisto Okumura, Oosaka, s-ino Namiko Isiguro, Tokio, ges-roj Emori, Goludo-propaganto, Tyohu, ges-roj Nakazima, Hatiozi, Radio-amatoro, kaj el Hokkaido s-ro Eguti, Otaru kaj mi Yamaga, Otaru.

Unue ni flugis de Narita aerhaveno rekte al Helsinki, Finnlando, tra Norda Pol^o la sekvantan tagon post 13 horoj. Post unu taga resto ni flugis al Leningrado, Sovetunio. Tie multaj esperatistoj bonvenigis nin ĉe la aerhaveno kunportante belajn florojn kaj ili disdonis al mi. Tio estis la unua paŝo al Sovetunio kaj ni sentis tutan amikecon kaj trankvilecon.

Ni pasigis du tagojn en Leningrado kaj travigardis la belan urbon, palaxon, muzeon kaj parkon. En la vespero ni havis intiman kunsidon en la hotelo. Maljuna s-ino Barbara Cvetkova bone aranĝis kaj zorgis nin.

La sekvanta vizito estis Moskvo, la ĉefurbo de Sovetunio. Ni eniris al la grandan hotelon, "Cosmos", konstruita en la okazo de la pasinta Olimpiko. Ĉi tie ankaŭ ni 2 tagojn restis. Unue ni iris al la fama "Ruĝa Placo". Tie multaj homoj kaj junuloj kaj ankaŭ geknaboj kunvenis amase sinsekve. Ĉirkaŭe estas videble fortikaĵo, preĝejoj diversformaj. Ni eniris la Kremlin Palaco, tamen nur sur strato piede.

La metro en Moskvo estis mirinda. Frumatene multe da laboristoj rapidis. La klindado de la subtera movŝtuparo estas rapida kaj kruta, pli ol 100 m, longa subteren. Ili alĵuras sur la ŝtuparon kaj kuradas same kiel ŝmioj. La metro estas konstruita tute fortike kaj pli ol 100 metrojn profunda subtero. Tamen la subtera vojo estas larĝa kaj la muroj eĉ ornamitaj de skulptaĵoj kaj pentraĵoj. Ĝi estas verdire aerdefenda ŝirmejo.

La 29-an de julio ni flugis al Budapeŝto. Ĉe la aerhaveno mia konato familio s-ino Trauttweinne bonvenigis min kun du filoj. Nia hotelo "Buda Penta" situas en Buda kvartaro trans Danubo, nove konstruita bela granda hotelo. La sekvantan tagon ni iris al la kongresejo, granda halo de sporta centro, tra bone aranĝita metro, post dekkvin minutoj, pagante nur unu folinton. La trafiko kostas en la tuta urbo egale unu folintoj.

Ĉe la giĉeto amase kunvenis la kongresanoj aliĝintaj, tamen baldaŭ ni povis ricevi la kongreslibron kaj nomkarton kaj aliajn necesajn. La kongresa halo estis sufiĉe vasta kaj pli ol 5,000 kunvenantoj facile povis sidi sur siaj sidejoj. En la interkona vespero unue mi povis renkonti ges-rojn Kleemann, s-ino Yukie Iisima, anakŭ ges-roj Uesink, edzino Akiko Nagata, s-ron Tibor Sekelj, Jugoslavio, kaj aliajn. Tie kaj tie eksplodas gaja kaj ĝoja krioj- estas granda bruo.

Ĉe la malferma soleno ĉeestis la vicprezidanto de Hungara ŝtato kaj salutis kaj multaj ambasadoroj ekslandaj, escepte japana. La kongreso daŭris de la 30-a de julio ĝis la ferma soleno de la 6-a de aŭgusto. En la daŭro okazigita duotaga aŭ tuttaga ekskursoj al diversaj lokoj, aŭ la oficiala bankedo luksa kaj plie danco tute gaja kaj vigla. Urborigardo estis ankaŭ interesa.

Mi vizitis mian konaton s-rinon Trauttwejnne kaj du filojn jam kreka^{itaj}. Mi portis taŭgajn donacojn por ili, por junulo t.n. "paso-con" kaj digitala horloĝojn kaj aliajn. Ili bonvenigis min tutkore kaj gvidis al diversaj intereasaj lokoj kaj ankaŭ mi akompanis s-ron Eguti al la domo de f-ino Gabriella, ŝia fratino. Ŝi loĝas ekster la urbo kaj havas larĝan legomĝardenon. Por mi estis tute mirinde, ke mi trovis iliajn domojn tute saman kiel antaŭe 17 jaroj, kiam la universala kongreso okazigita en Budapeŝto.

Ni vidis ankaŭ f-inon Yuko Nomura. Ŝi estas gradianto de Hokkaido Eduka kolegio kaj studentino de Prof. Misawa. Ŝi nun studas muzikon en Budapeŝita akademio. Iun posttagmeze mi kun s-ro Eguti vizitis ŝian ĉambron. Ni estis gvidataj de ŝi per aŭtobuso sur strato kaj atingis kvietan kvartalon en la urbo. Ŝi luas unu grandan salonon, malgraŭ 4 etaĝa, ornamitaj mebroj kun granda piano. Aparte ŝi havas dormĉambron. Ŝi bonvenigis nin kun elkoraj japaĵaj maĝaĵoj preparita de si mem. Ni gustumis "Morisoba" kun bongusta supo. Post fotado ni adiaŭis kontente. Aliajn diversajn interesajn rakontojn mi povas rememori.

Finfine ni devis forlasi memorplenan Budapeŝto kaj flugis al Parizo kaj revenis hejmen sen akcidento kaj tute sana. Dankon !

Fine nia japana eminentulo s-ro Yosimi Umeda estis elektita al komitatano de UEA kaj plie de Vicpresidanto de UEA kune kun Prof Tonkin, iama presidanto de UEA, Usono. Estas granda kaj ĝoja novaĵo en Japana Esperantujo.

Aldone s-ro Eguti parolos pri la vojaĝo.